

日本人高齢者の死生観に関する研究の現状と課題

中木里実^{*1,2}・多田敏子^{*3}

Issues Surrounding Life and Death among Japanese elderly

Satomi NAKAGI and Toshiko TADA

ABSTRACT

Elderly people must come face to face with death in the near future. The elderly who try to come to terms with their own death suffer less at the end of their lives. In this Paper, we examined scholarly papers that death with this issue. We did searches on CiNii and Medical Abstracts Society web of Japan for the key words “death” and “elderly” for papers written in the past ten years. The result of this was a better understanding of life and death, the world after death, what is thought of as a desirable death and necessary support at the end of life. When the elderly come to the end of life, it is important for them to discuss matters of life and death with others. Though they may desire to discuss life and death, there is often nowhere for them to do so. It is necessary for them to have the opportunity to discuss life and death.

KEYWORDS : Japanese elderly, life and death, necessary support at the end of life

I. 諸言

日本は現在、世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を迎えている。高齢化率の上昇傾向は今後も進み、いわゆる「団塊世代」(1947～1949年に生まれた人)が65歳以上となる2013年には、高齢者人口は3,000万人を超え、高齢化率は26.8%と推計されている。団塊の世代が天寿を全うしようとする2030年代以降には、年間死亡者が170万人に及ぶ多死時代が到来する¹⁾。

高齢者は、身体的・精神的機能の衰退、社会的役割の喪失、親しい人との別れなど、様々な喪失を体験する。心身の機能の衰退は、趣味や仕事といった社会活動への参加を困難にする。自分自身の衰退を認めなければ、活動範囲が狭くなっていくことに追い詰められていく可能性が高い。さらに高齢者は近い将来に訪れる自分自身の死と向き合っていかなければならない。高齢者にとって死は、避けようのない間近に、せまっている。

高齢者が、自分自身の死に備え、未解決の問題に決着をつけようとすることは、人生の終わりを迎える際の苦悩を和らげることにつながると考えられ

る。現代の高齢者の死生観について理解することは、人生の終末に向かいつつある高齢者に対する支援を考える上において必要である。本研究は、これまで報告されてきた論文を概観し高齢者の死生観を理解しようとするものである。さらにこの分野での今後の課題を明らかにする。

II. 目的

本研究の目的は、高齢者の死生観に関する文献から、研究の動向と日本人高齢者にとっての死の意味と今後の研究課題を明らかにし、今後の高齢者支援への示唆を得ることである。

III. 研究方法

1. 分析対象論文

高齢者の死生観に関する論文について、2003～2012年の10年間に日本国内で発表された原著論文を対象とした。データベースは、医学中央雑誌 web 版、国立情報学研究所が提供する論文データベース CiNii (国立情報学研究所論文情報ナビゲータ)を

用いた。検索式を「高齢者 and 死生観」とした結果、医学中央雑誌 web 版では657件が該当し、CiNii では、37件が該当した。その中から、原著論文のみを採択した。さらに、日本人の文化的背景を勘案して、日本国内で研究を実施した文献を対象とした。また研究目的が高齢者の死生観と関連のない論文を除き、最終的に23件の論文を対象とした。

2. 分析方法

- 1) 対象文献のリストを作成し、「テーマ」「掲載雑誌名」「掲載年」「研究の種類」「研究対象者の条件」「要旨」を項目としてあげた。
- 2) 1) のリストのうち、掲載年ごとに集計を行った。研究の種類は、質的研究、量的研究、混合研究（質的研究と量的研究）に分類した。
- 3) 1) のリストのうち、対象論文に記述されている「研究対象者」「研究の目的」「研究方法」「明らかにされた結果」に焦点化して整理した。
- 4) 分析のすべての過程において看護系大学の教員にスーパーバイズを受けて、分析結果の信頼性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮は、論文の著作権を侵害することがないように留意した。

IV. 結果

1. 文献対象数

年別の論文数を以下に示す（図1）。2003年42件、2004年63件、2005年79件、2006年73件、2007年80件、2008年65件、2009年58件、2010年52件、2011年69件、2012年76件であった（表1）。その内、分析対象となった文献は、2003年1件、2005年1件、2006年2件、2007年1件、2008年6件、2009年2件、2010年5件、2011年4件、2012年1件であった（表2）。

表1 年別研究数（抽出数全体）

年	研究数
2003	42
2004	63
2005	79
2006	73
2007	80
2008	65
2009	58
2010	52
2011	69
2012	76
合計	657

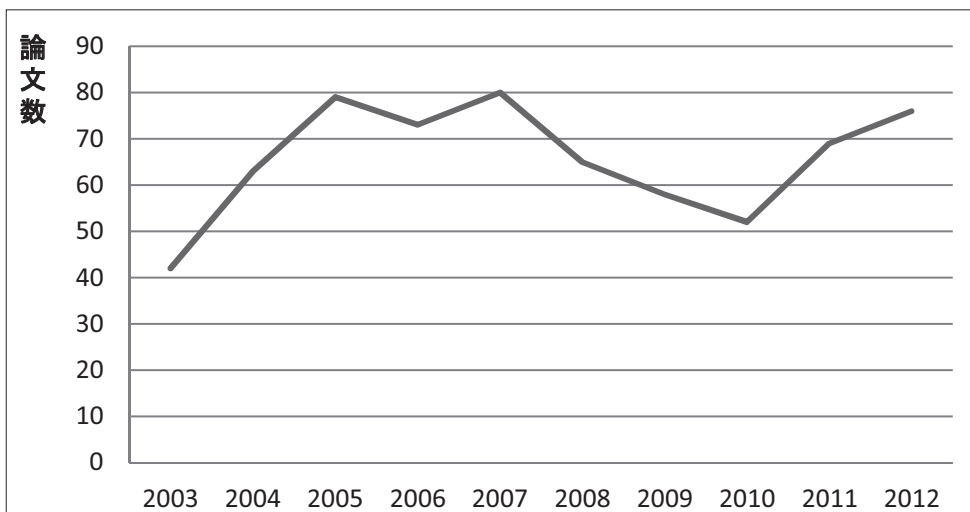


図1 年別抽出論文数

表2 年別分析対象論文数

年	論文数
2003	1
2004	0
2005	1
2006	2
2007	1
2008	6
2009	2
2010	5
2011	4
2012	1
合計	23

2. 研究の種類

質的研究は11件、量的研究は11件、混合研究が1件であった（表3）。

表3 研究方法の種類

種類	論文数
質的研究	11
量的研究	11
混合研究	1
合計	23

3. 研究対象者

分析した論文で対象としていたのは、有配偶者、身体疾患を抱えた高齢者、在宅で元気に暮らす高齢者、入院中の高齢患者、通所リハビリテーションを利用している在宅高齢者、老人大学の受講生、訪問看護師と多岐にわたっていた。

4. 研究分野

対象となった論文の研究分野は、心理学10件、医療福祉が7件、看護学が5件、宗教学が1件であった（表4）。

表4 研究分野別論文数

分野	論文数
心理学	10
医療福祉	7
看護学	5
宗教学	1
合計	23

5. 研究内容

文献検討に基づいて明らかにされた内容について以下にまとめた（表5）。

a. 死と生の捉え方

高齢者が、死の恐怖や現世からの回避を期待する傾向は高くない²⁾という報告や、死の回避については、男性が女性よりも有意に高い³⁾との報告がある。また、自分自身の死の受容は、女性が男性よりも高い⁴⁾という結果がある一方で、女性高齢者は、死に対して逃避的で男性高齢者よりも死を受容することが難しい⁵⁾と異なる結果を示している。また、石野⁵⁾は子や孫との関わりに居場所が感じられたら、子や孫の存在が死の受容を促す要因となると述べている。要介護度別では、重症障害者ほど死の受容と無関心が減少し、死に対する恐怖が増加していた⁴⁾。

高齢者は人とのつながりをもとに自分のあり方や生きる意味を探している⁶⁾ことを示唆している研究がある。また、自分の寿命を意識し死を身近に感じており⁷⁾、高齢者の多くは死について考えたことがあるものの、まだ遠い未来と考える傾向がある⁶⁾との報告もある。また、死について考えるがそれを他者に語ることはしない傾向⁸⁾を示すものもあった。さらに、高齢者は、死後に肉親に会える等、死後の世界を望んでいる¹⁴⁾という報告がある。死後の世界が実際に存在するかどうかが問題なのではなく、死後の生について話し合うことが重要であり、¹⁶⁾死を主体的に考える体験につながることを示唆されている。

b. 高齢者の望む死の迎え方

身体的疾患のある高齢者が死を意識した際、安定した死生観を持つことで生きる意味を失いにくいことが示唆されている⁹⁾。ライフストーリーの分析で

表 5 文献一覧

NO	文献	研究対象者の条件	研究の目的	研究方法	明らかにされた結果
1	田口ら ²⁾	65歳以上の有配偶者	高齢者の生き方が死に対する態度とどのような関連するかを検討	尺度を用いた量的な調査文章完成法や、自由記述による人生の目標に関する質的な調査	人生における意味・目的の明確さが異なる3群や性別による差が確認されたが、どの群も死の恐怖や現世からの回避を期待する傾向は高くはないことが示された。
2	中木 ³⁾	60歳以上	高齢者の死への態度と状況要因や宗教観との関係性の検討	フェイスイシュー、個人的な経験、生活状況などと、DAP-R(Death Attitude Profile-Revised)、「宗教観尺度」を用いた量的な調査	「死の回避」については、男性が女性よりも有意に高かった。状況特性的に見てみると、現在の生活にとっても満足している群が、「死の恐怖」が最も低く、満足していない群が最も高かった。死別家族がいる群がいない群よりも「接近型受容」が高かった。信仰については有信仰群が無信仰群よりも「接近型受容」が高いことが示された。
3	彦ら ⁴⁾	高齢者	高齢者が生と死についてどのように捉えているのかを文献検討から把握	文献内容を、(1)死に対する思い、(2)死への準備、(3)健康レベル別に分けた死生観、(4)死をふまえて生を見る・スピリチュアリティ、(5)終末期ケア、に分類・整理	高齢者が捉える生と死として、1. 高齢者の多くは死について考えたことがあるものの、まだ遠い未来と考える傾向がある、2. どのような死を迎えたいかを家族や他者と語る場がない、3. 高齢者は人とのつながりをもとに自分のあり方や生きの意味を探している、の3点が挙げられた。
4	谷田 ⁷⁾	19歳から95歳まで	「死への準備」に関する若者・中年・高齢者の認識を比較	若者・中年・高齢者を分析。8因子間の影響力をパス図で比較	1 高齢者は死を身近に感じ、若者は死を抽象的にとらえている。高齢者が死への準備をしているのは、自己の寿命を意識しているためと考えられる。
5	中川ら ²³⁾	85歳以上の超高齢者	心理的発達を遂げている超高齢者の心理的発達過程を探索	8人を対象に面接調査を実施、日常生活での体験を記述解釈的現象学の視点から質的分析	語りから「つながっていること」「変わっていくことに気づくこと」「変わらないことを見いだすこと」「自分だけにできることをみつけること」の4つのテーマを抽出した。超高齢者の生の体験は、客観的な事実から成る状況に身をおきつつ、二元的思考を脱する実存的な体験としてとらえることができる。
6	谷田ら ⁸⁾	19歳から95歳	死への準備について調査	「死への準備」27項目を量的に分析8因子間についてパス図を作成	死について考えるがそれを他者に語ることはほしめない傾向が見られた。「死への準備」への支援には、誰もが死を回避したい思い、死後の世界観を尊重することが重要である。
7	新屋敏 ¹²⁾	高齢者	身体的病いを抱えた高齢者の「生きざる意味」を探索	Purpose in Life Test を実施病や死、家族に対する意味づけの相互関連性と「生きざる意味」との関係を量的に分析	罹患により死を意識した際、安定した死生観を持つことは、「生きる意味」を失い難いことが示唆された。高齢者の望む役割が家族の側からも認められることが存在価値の実感に影響する。
8	吉田 ⁹⁾	身体疾患を抱えた高齢者	高齢者が考える人生の終末期(エンドオブライフ)の迎え方を明らかにする。	アンケート調査を量的に分析	回復の見込みのない病気の告知は8割以上が希望するが、余命の告知を希望する者は5割強で、約6割が自宅で家族による介護、または在宅サービス希望し、施設や病院を希望する者は4割であった。

NO	文献	研究対象者の条件	研究の目的	研究方法	明らかになされた結果
9	深澤ら ¹⁰⁾	高齢者	高齢者自身の終末期における「生死」の考えを明示	半構成的面接を実施 データを質的に分析	高齢者は「痛みの回避」や「くも膜の穿刺」など「苦痛緩和」を望んでいることが多かった。＜眠るが如き＞や＜自然死＞等を希求していた。＜死への恐れ＞を抱く一方、生死は表裏一体と考えている。《死後の世界》は＜信じる＞＜肉親に会える＞等、死後の世界を希求していると考えられる。
10	高岡ら ¹⁰⁾	在宅で暮らす元気高齢者	在宅で暮らす元気高齢者の死に対する思いを明示	死生学に関心のある1事例に対するインタビューを実施 質的に分析	高齢者が死を考えたとき、死と自らの人生課題について考える必要があること、老年者同士が死について話し合いをすることで他者の経験がわかり学習の機会が広がること、死後の世界が実際に存在するかどうかが問題なのではなく、死後の生について話しあう中で自ら考えることが重要であることがわかった。
11	山口ら ²¹⁾	入院中の高齢者	施設に入院中の高齢患者が、どのような終末期を迎えたいかについて調査	施設に入院中の高齢患者に、「どのような終末期を迎えたいか」についての質問紙法による調査	終末期医療については42%で関心があり、20名は医師から直接説明を受けたいと回答した。余命1ヵ月程度の場合、延命処置は40名(80%)が「止めるべき」、「続けられるべき」は4名(8%)であり、持続的植物状態の患者の延命処置は47名(94%)が「止めるべき」と回答した。予め延命医療を拒否することを書面に残すリビング・ウィルについては、考え方には賛成50%、賛成するが書面に残す必要はない20%、賛成しない10%であった。
12	伊藤 ¹⁷⁾	女性高齢者	ターミナル期の患者への援助を検討	ターミナル期にある肺癌患者(70代女性)が告知を受け亡くなるまでの過程の事例研究	1) 死にゆく人の心理には肉体的苦痛と精神的苦痛が大きく影響することから、疼痛を取り除くことは肉体的な安楽だけでなく精神的な安寧をもたらす。2) 患者が死を受容するには、治療に対する満足感と人生への振り返りが必要である。
13	川島 ¹⁰⁾	女性高齢者	死生の意味づけと宗教との関係性について検討	浄土真宗の門徒の女性高齢者のライフストーリーを分析	女性高齢者のライフストーリーを分析することで、死生の意味づけと宗教との多様な関係性について、家の宗教との関わりを通じた死生の意味構成の生涯発達プロセスが描き出された。
14	高岡ら ¹⁸⁾	高齢者	高齢者の死生観を明示し、死の準備教育の確立を検討	高齢者の死生観に関する原著論文39件を分析	高齢者の死の迎え方に関する希望が多岐に亘っていること、死を考えることでも不安や恐怖と結びつくことがあることが分かった。
15	石井 ²⁰⁾	老人大学の受講生	準備学習への参加により高齢者の死の準備行動に対する自己効力感と死の準備行動の促進の検証	死の準備学習への参加により自己効力感と死の準備行動を分析	対象者の80%が「尊厳死や延命治療」「病名告知」など死についての話をし、日常生活の中に死の話題を取り上げられることがかなり多い現状が示された。その一方、「身の回りの整理」や「やりに残した事柄への取り組み」については実践率が低いことから、認識と行動との間に距離がある側面も浮かび上がった。
16	笠原 ¹⁾	通所リハビリテーション(デイケア)を利用している在宅高齢者	通所リハビリテーション(デイケア)を利用している在宅高齢者の「死生観」の調査	通所リハビリテーション(デイケア)を利用している在宅高齢者の「死生観」を問診表による聞き取り調査をし、分析	自らの死については「受容」が70%に及び、性別では女性は80%を超えていたのに対し男性は57%に止まり、恐怖(22%)やタブー観(14%)がより高率であった。対象を前期高齢者(65~74歳)と後期高齢者(75歳以上)間で比較すると「恐怖」は前者の25%から後者の18%に、タブー観は13%から4%に減少し、「無関心」が0%から14%に増加していた。要介護度別では重症障害者ほど「受容」と「無関心」が減少し、「恐怖」が増加していた。死へのプロセスに関しては家族の決定にまかせるが多、終末期医療や緩和ケアの情報を知らない人は少なく、「死に場所」の希望は自宅が64%と最も多く、希望と現実を良く弁えていることが示唆された。

NO	文献	研究対象者の条件	研究の目的	研究方法	明らかにされた結果
17	川島 ²⁰⁾	高齢者	高齢者の死の意味づけと宗教との複雑な関係性について検討	1 老年期の浄土真宗僧侶を対象に半構造化面接を実施 ライフストーリーのテーマと意味を質的に分析	死の意味づけの源泉としては、浄土真宗との教育的関わり、家族との死別体験、門徒や友人との関わり、重篤な病や事故の経験、自己の死の意味づけの5つが同定され、それらの類型との関係性が明らかとなった。
18	酒井 ¹⁹⁾	75歳以上の入院患者	患者が自分の生き方を自己決定するために必要な支援のあり方を検討	75歳以上の入院患者に、自らの生(死)に対するイメージについて半構造的面接を実施し、内容分析	【今後の自分を予想しようとしなさい】【家族に介護負担がかからないことが優先】【死について語れる場所がない】【病院の医療への期待感】の4つのカテゴリーが抽出された。
19	生田ら ¹¹⁾	75才以上の高齢者	指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の「お迎えを待つ」という表現の意味を探索	面接を実施 逐語録から死を示す言葉を選び、意味上の要約と関連を質的に分析	現状をどのように意味づけて生活していくのかという点が、お迎えの待ち方に影響を及ぼすことが示唆された。
20	石井ら ¹³⁾	老人大学の受講生	高齢者の死の準備状態と個人要因・家族要因・看取り体験との関連を明示	老人大学の受講生に、死に関連する話題、死の準備行動、フェイスマシートの質問紙調査 SPSSで量的に分析	自分の死に対しては自宅の希望が多く、依然として「墓の上で」と言われる死に対する意識が強いことが伺えた。死についての話題と準備については、自分の死が選べられないときの対応について話をし、希望する亡くなり方を伝えるなど、自分の死への対処率が1997年を境に急増したことが明らかである。自分自身の死の準備行動が急激に進んでいる面も示され、死に関しても準備することで適応していく学習であることが示された。
21	道廣ら ²¹⁾	18～89歳	介護保険制度等認識の構造化	介護保険制度等認識尺度による調査を実施 因子分析, 共分散構造分析による構造化	高齢者は、介護保険制度の知識が高く、「成年後見制度」とも因果関係が強かった。世代間の違いを考慮して、影響力が強い項目からケア・改革を働きかけると効果的である。
22	石野 ⁵⁾	65歳以上の高齢者	引き継がれていく死生観の調査	老人用 SCT の一部を用いて、「自己イメージ」「生と死のイメージ」「価値観」について質問紙調査を実施 カテゴリーに従って分類	①男性老人は死を冷静に受け止め、避けられぬことであるとしつつも、肯定的な姿勢を示す傾向が見られた。②女性老人は死に対して逃避的で拒否的な態度を示す傾向が見られた。さらに、女性老人は男性老人よりも死を受容することが難しいことも示唆された。また、子や孫は死の受容の関連要因として挙げられた。子や孫との関わりに、いわゆる居場所が感じられず、子や孫の存在が死の受容の要因になりうることが推察された。
23	浅見 ¹⁵⁾	訪問看護師	在宅における終末期高齢者が表出した死生観の調査	表出された死生観を含む言語はデータとしてコード化 質的に分析, 分類	在宅での終末期療養は、日常生活の延長上にある死への過程(生の過程)であり、ほぼ高齢者のそれまでの生活習慣や環境が持続されている。伝統的な宗教的伝統や儀礼などを身近に意識しながら、在宅療養者は、自然な死への過程を迎えていく。現在も伝統的な宗教的・習俗的な死生観が高齢者の望む終末期を演出する一つの装置として機能している。

は、死生の意味と宗教との多様な関連性が示されている¹⁰⁾。また、現状をどのように意味づけて生活していくのかということが死（お迎え）の待ち方に影響を及ぼすことが報告されている¹¹⁾。身体疾患のある高齢者は、自宅での介護、在宅サービスを望んでおり¹²⁾、死に場所の希望は自宅が最も多い¹³⁾ことが示されている。自分自身の終末期には、痛みの回避や誰かに傍にいてほしい等の苦痛緩和を望み、眠るような自然死を希求している¹⁴⁾という報告もある。在宅終末期高齢者は、伝統的な宗教的・習俗的な死生観が自分の望む終末期を演出し、自然な死への過程を辿っていく¹⁵⁾ことを示す研究もある。

c. 課題および今後必要と考えられる支援

ターミナル期にある高齢患者が死を受容するには、治療に対する満足感と人生への振り返りが必要である¹⁷⁾とされている。自分自身の死について準備することで終末期に適応していくことができる¹³⁾との研究結果もある。死に対する過度の不安や恐怖から健康障害を起ささないような、死の準備教育が必要であるが、高齢者に対する死の準備教育を体系的に行っているという報告は見当たらなかった¹⁸⁾ことも示されている。

高齢者が死を考えるとときには、自身の死と人生課題について他者と話をする中で考える必要がある¹⁶⁾ことが指摘されている。現実には、どのような死を迎えたいのか他者と語る場所がない⁶⁾、自らの死について語れる場所がない¹⁹⁾との報告がある。

支援として、死を意識しつつも家族や社会の中で「生きがい」を考えていけるようなサポート、および高齢者が意思表示できるような場づくりの必要性が示唆されている⁶⁾。看護職は、高齢者同士の話し合いの際に導入のための方向づけを行い、話し合いの内容については、見守る姿勢が必要である¹⁶⁾ことや、訪問看護師等の研修に死生観教育を取り入れることの意義¹⁵⁾が示唆されている。

V. 考察

1. 研究の動向

抽出された文献数の動向を見ると、2004年から急

増し2007年まで多数を維持している。2008年から2010年まで徐々に減少しているが、2011年以降再度増加してきている。全体を通して、毎年文献数は50件を超えている。この背景には、2003年には、介護保険制度の見直しが行われサービスの利用者は大幅に伸びたこともあり、自立して地域で暮らしている高齢者が増えてきたこととも関連がある。高齢者自身が、長い老後の中で、遠くない先にある死について、考えようとする意向を捉えたものではないだろうか。

研究の種類では、質的研究と量的研究の数が各11件と同数であった。これは、対象者の個別性に焦点を当てると同様に、高齢者全般の心理的側面についても理解を深めようとする傾向を示すものである。

2. 高齢者の死生観

抽出された文献を検討したところ、高齢者は死が間近に迫った時に心身の苦痛緩和を望んでおり、自宅での自然な死を希望していることが示された。その際に、居住している地域の宗教や習俗的な死生観が重要な役割を果たすことが明らかになった。このような宗教や死生観が、地域で暮らす高齢者を支援する際の重要な手がかりとなることが考えられる。

高齢者は、死の準備が必要であると認識している¹⁸⁾が、身の回りの整理や、やり残した事柄への取り組みについては実施率が低いことから、認識と行動との間に距離がある²⁰⁾と指摘されている。現状をどのように意味づけて生活していくのかが自分自身の死への対処に影響があることが示唆されており、これまでの人生のみならず現在の生き方についても自分自身で振り返っていくことが重要であると考えられる。

高齢者の死生観については一致した見解は得られていないが、寿命との関係から死を身近に感じ、これまで生きてきた意味やあり方を模索していることが示された。それを他者に語ることはしない傾向があるが、他者と語り話しながら、生と死について考えられる場が必要であると考えられる。

高齢者は、死後の世界が存在することを望んでいるが、その存在の有無よりも死後の自分の存在につ

いて考えることが重要であることが示されている。死後の生についても、他者と話し合いながら考える機会や場が必要なのではないだろうか。

VI. 今後の課題

本研究では過去10年間の文献を通して、高齢者が考えている死生観について概観した。今回抽出した研究の大部分は実態調査研究であった。文献によっては相反する見解が示される等、高齢者の死生観についてまだ一致した見解は得られていない。高齢者の終末期への支援を充実させていくために、高齢者の死生観について実態を把握しておく必要があるが、一般化するためには、今後さらなる研究の蓄積が必要である。

平均寿命が世界最高水準となっている現在、老年期となってからの人生も長くなってきている。その長い老後の先にある「自分自身の死」についてどのように準備していくかが、人生を統合するためには大きな課題である。自分自身のやがて来る死を考えるとときには、死生観や人生課題について、自ら考えることが重要である。そのためには他者との語り合いが必要であり、高齢者自身も生と死について語りたいたいと思っているが語る場所がないという現実があった。生と死について語る場や機会づくりが今後の課題である。また、高齢者支援を行う支援者も、自分自身の死生観を明確にしておく必要がある。

- * 1 徳島大学大学院保健科学教育部
- * 2 四国大学看護学部看護学科
- * 3 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部看護学講座

文献

- 1) 内閣府 平成24年度版高齢社会白書
(www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w.../24pdf_index.html 2013.4.20アクセス)
- 2) 田口香代子ら, 2012, 高齢者の生への価値観と死に対する態度 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 14, 57-68
- 3) 中木里実, 2011, 高齢者の死への態度に影響を与える要因. 臨床死生学, 16(1): 67-78
- 4) 笠原浩一郎, 2008, 通所リハビリテーション(デイケア)利用中の在宅高齢者の死生観について. 群馬医学, 87: 31-39
- 5) 石野学, 2010, SCTによる高齢者の死生観の研究. 龍谷大学教育学会紀要, 9: 35-51
- 6) 彦聖美, 田島祐佳, 2011, 高齢者が捉える生と死に関する文献検討. ホスピスケアと在宅ケア, 19(1): 42-49
- 7) 谷田恵美子, 2011, 「死への準備」に対する認識 若者・中年・高齢者の比較. 養護・保健科学研究誌, 11(1): 166-175
- 8) 谷田恵美子, 遠藤明美, 安原由美子ほか, 2010, 「死への準備」に対する認識; 死を回避したい思いと死後の世界観の尊重. インターナショナル Nursing Care Research, 9(4): 1-9
- 9) 吉田千鶴子, 2010, 高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方; エンドオブライフ期への支援システム構築をめざして. 豊橋創造大学紀要, 14: 95-110.
- 10) 川島大輔, 2009, 宗教を通じた死生の意味構成; ある女性高齢者のライフストーリーへの事例検討. 人間性心理学研究, 26(1-2): 41-52
- 11) 生田貴子, 藤巻尚美, 流石ゆり子, 2007, 指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとって「お迎えを待つ」ということ; 高齢者が語る end-of-life から. 山梨県立大学看護学部紀要, 9: 1-12.
- 12) 新屋敏敏恵, 2006, 身体疾患を抱えた高齢者の「生きる意味」に関する臨床心理学的研究; 「病, 死, 家族」に対する意味づけに視点を当てて. 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 1: 30-39.
- 13) 石井京子, 上原ます子, 2003, 高齢者の死の準備状態に関する研究; 5年間の経時の変化から. ヒューマン・ケア研究, 3-4: 1-10
- 14) 深澤圭子, 高岡哲子, 根本和加子ほか, 2010, A 地域の高齢者が考える自らの終末期. 名寄市立大学紀要, 4: 63-68.
- 15) 浅見洋, 2006, 在宅における終末期高齢者が表出した死生観とその宗教学的考察; 訪問看護師への聞き取り調査を通して. 宗教研究, 80(2): 479-504.
- 16) 高岡哲子, 伊藤美和, 深澤圭子, 2010, 在宅で暮らす元気老年者がもっている死に対する思い; 死生学に関心がある1事例の検討. 名寄市立大学紀要, 4: 55-62.
- 17) 伊藤美代子, 2008, ターミナル期にある患者の死の受容における援助. 川崎市立川崎病院事例研究集録, 10: 59-61
- 18) 高岡哲子, 紺野英司, 深澤圭子, 2009, 高齢者の死生観に関する過去10年間の文献検討; 死の準備教育確立に向けての試み. 名寄市立大学紀要, 3: 49-58.
- 19) 酒井洋子, 2008, 入院した高齢患者の自らの生(死)

- に対するイメージの実態：事前に自分の生き方を自己決定できるための支援のあり方. 国立病院看護研究学会誌, 4 (1) : 20-24.
- 20) 石井京子, 2008, 高齢者への死の準備学習を促進するプログラムの実践活動. ヒューマン・ケア研究, 9 : 53-63.
- 21) 山口恵美, 安井かおり, 藤原桂子ほか, 2008, 入院経験のある高齢者が望む死の迎え方：入院患者, 施設入所者への質問紙調査から. 名古屋市厚生院紀要, 34 : 25-27.
- 22) 川島大輔, 2008, 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ. 質的心理学研究, 7 : 157-180.
- 23) 中川威, 増井幸恵, 呉田陽一ほか, 2011, 超高齢者の語りにみる生(life)の意味. 老年社会科学, 32(4) : 422-433
- 24) 道廣睦子, 土井さや子, 中桐佐智子, 2005, 死生観尺度の信頼性・妥当性の検討. 吉備国際大学保健科学部研究紀要, 10 : 11-17.

抄 録

高齢者は近い将来に訪れる自分自身の死と向き合っていかなければならない。高齢者が、自分自身の死に備え、未解決の問題に決着をつけようとする事は、人生の終わりを迎える際の苦悩を和らげることに繋がると考えられる。本研究の目的は、これまで報告されてきた論文を概観し高齢者の死生観を理解し、さらにこの分野での今後の課題を明らかにすることである。医学中央雑誌 web 版, CiNii を用いて、検索式を「高齢者」and「死生観」とし、過去10年間の原著論文のみを採択した。文献検討の結果、死と生の捉え方、死への対処、望ましい死の迎え方、死後の世界、今後必要と考えられる支援について理解できた。自分自身のやがて来る死を考えると時には、他者と話す機会をもち、自らの死と人生について考えることが重要である。しかし、高齢者は自身の生と死について語りたいと思っているが語る場所がないという現実があった。生と死について語る場と機会づくりが今後の課題である。

キーワード：日本人高齢者、死生観、終末期の支援